
生意気ルーキーは魔法少女!?

シャルロッテ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生意気ルーキーは魔法少女！？

【Nコード】

N0787V

【作者名】

シャルロッテ

【あらすじ】

魔女との戦いで不覚を取って死んだマミ。

しかし、「テニスの王子様」の世界に転生し、越前リョーマに成り代わり！

俺様幼馴染やその他の人々に言い寄られ、男装して青春学園に通う毎日。

そんなある日、魔女が目の前に現れて・・・。

しかも、魔法少女は自分一人だけ！？

これは、原作知識無しな巴ミ改め越前マミが、友情や恋を育みつ

つ魔女と戦う物語。

私こと巴マミについて

主人公設定です。

所々あれ？と思う所があるかもしれませんが、シャルロッテの趣味です。

スルーしてください。

ちなみに、著者の名前も分かる人には分かるものですが、こちらもスルーの方向で。

名前..越前 マミ

前世..巴 マミ

年齢..12歳(今年で13歳・・・)

身長／体重..151cm／38kg

容姿..魔法少女まどか☆マギカの巴マミの身長が少し低くなった。

つまり前世とほとんど変わらず。

(それでも分からない人はググって下さい)

性格..優しくて正義感溢れている。

厳しい時にはもの凄く厳しい。

ただし、チンピラやヤクザなど、人の迷惑になる存在(勿論魔女も)には容赦なし。

備考..まどか☆マジカの原作3話で死亡した後転生。

魔法使えます、頭も良いです。

何故か跡部が幼馴染。

男装して男子テニス部に所属している。

男装については、テニス協会・学校共に納得している。

でもばれる人にはばれる。

そして言い寄られる。

まどか達がない所為で寂しい今日この頃。

私こと巴マミについて（後書き）

シャ「あー、始まったなあー」

マ「ついさっきまで更新面倒くさいって言ってたのは誰よ……。

というか勝手に殺さないでくれるかしら」

シャ「原作が鬱展開だから仕方ない。

そして俺は後悔していない！

何故なら念願のマミさん逆ハーが出来たから！！」

シャルロッテ、叫びながら退場。

マ「ふう……。。

まあ。それじゃ、これからよろしくね、皆

それじゃあ！」

もう何もこわくない (前書き)

マ「これは・・・私が死ぬシーンね。
ちよつとグロテスクだから気をつけて」

もう何もこわくない

私が魔法少女になった理由がこれで正しかったのか。そう聞かれたら、何も返答出来ないと思うわ。

私は、あの時は生き延びることで精一杯だったから。今になって振り返ると、どうして家族全員で生き残りたいと願わなかったのか不思議なくらい。

それを今更言ってもどうにもならないことは知っているけれど、そうもなるわ。

そう考えてみると、鹿目さんはすごいと思う。

人のために、たった一回のチャンスを使えるんだもの。

まさに人間の鑑ね。

だからこそ、私は救われた。

心の底から、幸せになったって言い切れるくらいに。なのに。

目の前には、魔女の口。

そして、その口が大きく開かれ、尖った歯が覗く。

私にかかる、魔女の生温かい空気。

その全てが、これから私が死ぬことを意味していた。

鹿目さんと美樹さんが息を呑む音が聞こえる。

それすらも、どこか遠い世界の出来事のように思えて。

避けるだけの時間も、自慢のマスコット銃を出す暇もない。

「もう何もこわくない」

そんなついさっきの自分の台詞を頭の中で反芻する。

あんな台詞を言っておきながら、結局この有様。

鹿目さんとの魔法少女コンビ結成、楽しみだったのに。

これも、暁美さんの忠告を聞き入れず、油断した自分の所為。

私は、自分の死を悟り――――――――――次の瞬

間、激痛と共に世界が暗転し、最後に聞こえたのは自分が魔女に食
い千切られ、血を噴出す音だった。

もう何もこわくない（後書き）

マ「・・・」

シャ「・・・・・・・・」

マ「・・・・・・・・」

シャ「・・・ええと、ごめんなさい、マミさん」

マ「いいわよ、別に」

元から決まっていたことだもの」

シャ「大丈夫、これから幸せにしていくから」

マ「・・・・・・・・（泣）」

これが夢なら、うれしいなって（前書き）

シャ「・・・しばらくは、過去編こと幼少期編になりそうでs「あなたの更新が遅いだけよ」・・・さいですか」

マ「大体、サイトも更新してるのにこれってどうなのかしら」

・・・では、始まります。

これが夢なら、うれしいなって

・・・ここは、一体どこなのかしら。

私は確かに、死んだ筈なのだけれど。

見渡す限り黒い空間に浮かびながら、私はそう呟いた。

死んだ、という大事件が起こった筈なのに、不思議と冷静な自分がいる。

というよりは、実感できていないというのが実際の所でしょうね。尤も、そんなことを考えても何の解決にもならないのだけれど。

「それにしても、鹿目さんと美樹さんはどうなったのかしら？」

今頃はキュウベえと契約しているか、暁美さんが助けてくれているかのどちらかだろう。

自分としては、二人の今後も考えると後者であって欲しいけれど。そこまで考えて、思考を中断する。

どちらにせよ、もう私は死んでいるもの。どうなろうと、私の知る範囲じゃないわね。

そう思い、目を閉じる。

そしてその瞬間、瞼の裏でも感じられる程の光が溢れ、私の体が光に包まれた――――。

「おめでとうございます、元気な女の子ですよ！」

突如聞こえてきた声で、意識が覚醒する。

慌てて辺りを見回そうとするも、首が思う通りに動かない。

そんな調子で悪戦苦闘していると、一組の男女が私を覗きこんだ。見覚えの無い顔に、更に頭が混乱する。

どうしようか迷っていると、女の人の方が口を開いた。

「名前は・・・そうねえ、マミなんてどうかしら？」

「マミ、か。何かしつくりくるな、じゃあそれにしよう」

女の人の提案に、男の人が頷く。

そこまでの会話で、私は大体の事情を悟った。

きっとこれは、昔何かの本で読んだ、輪廻転生って奴ね。

そう考え、ふいにこれが夢なら、うれしいなって。

私はそう思った。

この世界には、鹿目さんも美樹さんも、暁美さんもない。

ましてやキュウベえだっているわけがない。

自分はこの世界で一人ぼっちなんだって。

私はそれを悟った・・・。

ううん、悟らざるをえなかった。

結局、魔法少女の————エントロピーに反するような願いを叶えた存在の末路なんて、こんなものなんでしょうね。

だからといって、私はキュウベえを恨んだりはない。

キュウベえは、ちゃんと忠告したし、私の願いも叶えてくれた。

それにあの子は、私の大切な友達なもの。

恨むだなんて、筋違いよ。

とりあえず、神なんてものがあるとは思わなくてもいいけれど。

正直に言くと、私はあなたを恨むわ、神様。

どうしてあなたはいつも私を不幸にするのかしらね。

お父さんも、お母さんも。

私だって、最後には不幸になった。

一体いつになったら、私を・・・ううん、私達を幸せにしてくれるの？

私はそんな言葉を最後に、眠りへと身を委ねた。

次に起きたときには家族みんなで笑っている、幸せな情景が広がっていることを祈りながら。

これが夢なら、うれしいなって（後書き）

シャ「まーシリアス」

マ「・・・駄文なのには触れないのね」

シャ「だって今更だから（キリッ）」

マ「・・・」（呆）」

なんてことない、私の日常（前書き）

マ「シャルロットが腹痛で倒れたらしいわ。

何でも食べすぎだとか」

シャ「ぐおおおおお．．．。

まじ腹イテエ．．．。

一応、これからほのぼのになっていくよて、い．．．。」

なんてことない、私の日常

結局、あれから。

夢オチなんてこともなく、私が転生したのは紛れも無い現実だった。この世界にも大分慣れてきて、平和に過ごしているわ。

・・・そんなことは良いから、とりあえず。

「マミィ、パパとテニスやらないか？」

目の前の現在の父親を殴ってもいいかしら？

・・・テニス、ねえ。

バマミだった頃はスポーツなんて授業でしかやらなかったもの。

あまり縁がない言葉に聞こえるわ・・・。

まあそれはともかく。

今の私は三歳よ、れっきとした。

三歳児にテニスって・・・父親としてどうなのかしら。

テレビで見たあの《サムライ南次郎》なのは分かったけれど、流石にこれはちよつと・・・。

そんなことを思いながらも、お父さんに連れられるままテニスコートへ。

もしかして、この家庭は金持ちなの？

自宅の庭にテニスコートって・・・。

本当に常識が通用しない世界ね、ここは。

「ほら、いくぞー」

早速コートに入り、ラケットを持つ。

テニスなんてやったことないから、お父さんの持ち方を見よう見まねで真似しただけ。

勿論サーブを返せる訳もなく、空振りしてしまった。

「はは、流石に三歳じゃ無理かー」

そういった父親に、私のプライドが刺激された。

いいわ、トコトン付き合ってやろうじゃないの！

そう決めた私の行動は早かった。

もう一度、と何回も頼み、空振りをしたらすぐに改善する。

そうして自分のやりやすいようにどんどん変えていき――――――
|。

パコーン！！

と、小気味良い音と共にボールが相手側のコートに入る。

さすがのお父さんもこれには驚いたらしく、目を白黒させていた。

「流石俺の娘だな、才能あるぞ！よし、もっとやるか！！」

そんなお父さんの言葉と共に、私のテニスの大特訓が開始。

お母さんが夕飯に呼びにくるまで、延々と続けられた。

夕食が食べ終わったら、日課の魔女辞典の製作。

これはいわゆる趣味みたいなもので、少しでも前世のことを忘れな

い為でもあるわ。

それに、もしもの時に備えて、準備をするに越したことはないものね。

まあ、それ以外のこともあるのだけれど、それはまたの機会に。

今日の項目を編集すると、今度はソウルジェムの様子を確認する。

濁っているかいないかで、大分今後が変わってくるから。

濁っているなら極力使わないようにしなくちゃいけないもの。

念には念を入れて、ってね♪

そして、また魔女辞典を見る。

間違った情報を書いてないか、一般人に読めないようになっていないか。

念の為、私はマジカルーン、と名付けた文字で書くようにしている。マジカルーンっていうのは・・・まあ、魔女の名前の表記に良く使うあの文字よ。

こうやって、今日も一日が終わる。

これが、なんてことない、私の日常。

私がやっと手に入れた、かけがえのない平穏。

なんてことない、私の日常（後書き）

シャ「ぐおおおおお・・・」

マ「ちよつと、明日登山なんでしょう？」

シャ「出来ればサボ、り、た・・・」

マ「・・・ハア」

懐かしい故郷（前書き）

シャ「過去編は切り上げること」
マ「面倒臭いらしいわ。」

・・・こんなのでいいのかしら」

懐かしい故郷

「日本に行くぞ、マミ！」

・・・え？

いきなり何なの？

とりあえず、説明を。

最近急に日本語を私に教えはじめたお父さん。

もともと母国語だから分かりやすいし、親が両方日本人だから格段不思議には思っていなかったんだけど。

どうやら日本に渡ることになっていたらしいの。

何でも、お父さんの師？にあたる人が、子供が出来たら自分の勤める学校に入れることを約束していたんだとか。

そういうことは、先に言っておいて欲しいわ・・・。

まあ、愚痴を言っても仕方ないもの。

すぐに準備に取り掛かり、その数日後。

私は、日本行きの飛行機の中にいた。

はいそこ、省略したとかいわない！

・・・コホン。

ごめんなさいね、つい。

まあそれはともかく。

アメリカで所属していたテニススクールの皆には止められたわ、

凄く必死に。

急に決まったことだったし、それなりに皆仲が良かったから当然ね。このままだと空港まで引きとめにきそうだったから、出発日は知らせなかった。

辛いのは私だって一緒なのよ……。

そんなこともあって、今。

「お前には男装して、男子テニス部に入ってもらおうぞ！」

目の前の父親を殴り飛ばしてもいいかしら？（二度目）

本当に自由奔放ね、この男！

周りの迷惑を少しは考えなさい！

（閑話休題。BGMに男の悲鳴）

ごめんなさいね、話が途中で。

まあそんなこんなで、男装して青春学園って中学に通うことになったの。

今更だけれど、この世界に見滝原は存在しないらしいわ。

だから当然見滝原中もなかったの。

……………（泣）。

そして、拒否権もなく決定。

それにしても、随分と恥ずかしい名前ね、この学校。

好き好んでこの学校に通う人の気が知れないわ……。

結局。

親に言われた通り、その学校に通い男子テニス部に所属することが決定。

為すがままになっているのは気のせい……じゃあないわね、きっ

と。

今更それを言っても、もうどうにもならないけれど。

流石に今ここで当り散らす真似はしないわ（さっき？さっきは・・・黒魔術よ♪）。

そして、日本に到着！

念には念を入れて、この時点で男装。

日本人にあるまじき金髪をショートカットのヴィッグで隠し、更に帽子を被る。

そしてサラシ。

少しきついけれど我慢よ、私！

そんなこんなで、懐かしい故郷に到着。

やっぱり変わってないわね、日本は。

さあ、レッツ男装生活！

私はそう意気込んで、目の前のお寺（仮住宅）に入ってしまった。

懐かしい故郷（後書き）

シャ「省いてサーセン」

マ「バカね、あなた」

シャ「ううう・・・。」

とりあえず、次からは青学編（というか初期編）です」

厄介な相手の宣戦布告

どうもお久しぶり。

私は巴・・・、ごめんなさい。

越前マミよ。

改めてよろしくね。

さて、自己紹介はそのくらいにして。

私は今、青春台行きの電車に乗ってるの。

何かお父さんが、

「よしマミ。男装して大会に出て来い！」

・・・とかいって試合に勝手にエントリーしたの。

しかも16歳以上の部に。

少しだけ、ティロ・フィナーレを撃ちたくなったわ。

魔力を消費するからしないけれどね。

まあ、それでもエントリーしちゃったものはしょうがないし、仕方ないから私はヴィッグを被って、更に帽子も被り。

なおかつサラシを巻いて、苦しい思いをしながら電車に乗った。

周りから奇異な目で見られたんだけれど、何だったのかしら・・・

(注・・・端から見たら物憂げな顔をしている美少年です)。

そんな風に思いながらウトウトしていると、急に大声を上げられて一気に覚醒した。

そして声のした方向に顔を向けると————ラケットを振り回している男性とその腰巾着が。

・・・ここは公共の場よ、男性方。

「お前ら自分のグリップの握り方もしらねえのかよ！ トップスピンを打ちてえならウエスタングリップだろ！！こうやってラケットの面を立てて握手する感じで握んだよ」

「おおー、流石佐々部！」

「バーカ当然だろ！！」

腰巾着の言葉に調子に乗り、更にラケットを振り回す佐々部さん（？）。

握り方以前の問題であるのに気付きなさい。
あなたのやっていることは只のバカよ。

そんな風に思いながら溜息をつく。

その時、ふと一人の少女が視界の端に映った。

やたらと怯えていると思ったら・・・ああ、ラケットが当たりそうなのね。

それは確かに大変ね。

面倒臭いことは嫌いだけれど、あのお嬢さんの為と思って・・・頑張りなさい、私！

「ねえ、煩いんだけど」

・・・ふう。

あら、どうしたのかしら？

ああ、口調のことね。

実は、男装するなら徹底的に！っていわれて性格も変えるように言われているの。

親の希望では、生意気な少年、って感じらしいわ。

まるつきり普段と違うような気がしないでもないけれど。

まあそこは目を瞑りましょう。

とにかく、それが理由でこの口調なの。

あら、佐々部さんがラケット落としたわね・・・勿体無い。

「・・・ハハ、ガキに注意されるとはな」

はいはい、ガキで悪かったわね。

でも本当だったら今頃は成人してるのよ、本当だったら！

・・・ムカついたわ。

少し身の程をわきまえてもらう必要がありそうね。

佐々部さんがラケットを拾う。

彼がグリップを掴んだところで、私は訂正をいれた。

「ピンポーン。上から掴むように持つのが正しいウエスタングリップの持ち方。良くいるんだよね、逆に覚える人」

・・・ふふふ。

これである人は腰巾着の前で醜態を晒したわ。

結局仲間に笑われてた。

さまあみなさい！

——青春台、青春台——

あら、ようやくご到着のようね。

素早く身なりを整える。

そして私は下車し、柿ノ木坂テニスガーデン——今回の試合会場——を目指した。

それにしても。

お父さんの書いた地図はやっぱりアテにならないわ。
予想しておいて正解ね。

そう思いながらマップを取り出す。

こんなこともあるのかと、念のためウェブサイトで検索し、コピーしておいたの。

流石に迷って失格、なんて洒落にならないもの。

私はそんなことを考えながら、北口に向かった。

ふう、試合終了。

え、どうして何もいわないのかって？

・・・全員レベルが低すぎて、あっけなく優勝できたのよ。

しかも大抵が途中で試合放棄。

すこし悲しくなったわ・・・。

自分を慰めるため、自動販売機へ。

こういう時はファンタを飲むに限るわ。

少し落ち込みながら歩いていくと、自動販売機の前に人だかり。

何かあったのかと思い、覗き込む。

そこで、さっきのお嬢さんが佐々部さんとその腰巾着に絡まれている。

「おい、手前のせいで折角のジャージが汚れたじゃねえか！」

はい、典型的ね。

ここまでベタだと流石に笑えてくるわ。

でも疲れたから試合なんてしたくないし。

仕方ない、強行手段よ。

「何してるんスカ、アンタ達」

私はさり気無く挑発しながら割って入る。

お嬢さんが驚いたような顔してたけど、どうかしたのかしら？
まあ、いいわ。

今はこの男性方よ。

「何だあ、手前！」

やっぱりね。

典型的だと思っただけだけど、本当にひっかかるだなんて。
相当単純なのね。

それじゃ、最終手段よ！

「別にアンタはどうでもいいんだけどさ、少し話があるんだよね。
アンタってさあ—————」

「¥@*#\$&■☆!!！」

私は佐々部さん本人にしか聞こえないくらいの声で【とある事】
を囁く。

その瞬間、彼は奇声をあげて飛びのいた。

・・・地球語を喋ってくれないかしら、切実に。

「お、おぼえてろよー!!！」

これまた典型的な捨て台詞を吐き、去っていく男性方。

これまた厄介な相手の宣戦布告を受けてしまったもので。

私はこっそりと溜息をつく。

そして彼らが見えなくなると、私は例のお嬢さんに向き直った。

厄介な相手の宣戦布告（後書き）

シャ「中途半端だけど、ここで一区切り」
マ「毎回思うけれど、あなた【・・・】の使用頻度が高くないかしら」
シャ「・・・・・・」（滝汗）

早速のネタばらし(前書き)

シャ「あれ、この小説の更新って気まぐれのはずなのに・・・」
マ「いつのまにかこっちがメインになってるわね」

早速のネタばらし

佐々部さんと腰巾着が去ったあと。

その場には、私と例のお嬢さんのみが残された。

「さて、大丈夫だった？」

外傷があるようには見えないけれど、念の為確認しておく。

女の子が怪我をしたら大変だね。

・・・何よ。

私は魔法少女だし、怪我なんてすぐに治せるからいいでしょう？

「あ、いえ、大丈夫です。助けてくれてありがとうございます！」

赤くなって首を振りながら感謝の言葉を述べるお嬢さん。

うん、やっぱりすっかりしてるわね、この子。

そんなことを考えていると、急に背後に人の気配。

「やれやれ、どこにもいないと思ったらこんなところにいたのかい。
探したよ、マ・・・リョーマ」

あら、誰かと思えば竜崎さんじゃないの。

そういえば、私の男装名はリョーマだったような気がしないでもないわ。

それにしても、どうしてこんなところにいるのかしら？

「アンタが決勝に勝ったのに、表彰終えた途端に行方眩ますからだろう」

行方を眩ますって・・・。

それじゃ行方不明みたいじゃないの、失敬ね。

それに私は順位なんてどうでもいいのよ。

テニスを楽しめればそれで十分なんだから。

そういうと、竜崎さんは顔を歪め————私の隣を見て、驚いたような表情をした。

視線の先には、お嬢さんがいる。

「知り合いなんですか？」

「知り合いも何も、あたしの孫だよ」

このお嬢さんが竜崎さんの孫ですって？

そういえば、よくよく見れば雰囲気似ているけれど・・・。

ちなみに、名前は竜崎桜乃さんというらしいわ。

「桜乃、こいつはあたしの教え子の子供の越前リョーマだよ」

竜崎さんが桜乃さんに私を紹介する。

桜乃さんが驚愕の表情でマジマジと私の顔を見ているけれど・・・何かあるのかしら？

そう尋ねると、慌てて否定した。

本人曰く、格好よかったから、らしいけれど。

仮にも女にそれは良くないと思うわ、桜乃さん。

・・・ああ、私は男装してるんだったわね。

「ちなみに、コイツは男装してるんだよ」

爆弾投下。

早速のネタばらしに、桜乃さんも私も呆然とした。

それって最初の自己紹介の時に言うべき事柄よね！？

思わずツツコミを入れそうになったが、それが無駄なことは今までの経験でよく分かっている。

仕方ないから、黙認することにした。

何より驚いていたのは桜乃さんで、ヴィッグを外さない限りはまるつきり男子に見えるそう。

感心したような感じで私を四方八方から観察していた。

・・・私は見世物じゃないのよ、桜乃さん。

そんなこんなで、家に帰るのは結局その3時間後になった。

急に桜乃さんがショッピングに行こうと言い出して、デパートの中を歩き回る羽目に。

そして女物の服を沢山買われた。

しかも黄色系統のスカートやワンピースばかり。

一体何があったというの・・・！

まあ、そんなこともあって今日も一日が終わった。

・・・あれ、これじゃ作文みたいじゃあ？

平和な暮らしが出来る世界（前書き）

やっ と青学編に突入です！

平和な暮らしが出来る世界

「んー、よし。これで完璧ね」

お久しぶりね、みなさん。

知らない人の為にも自己紹介。

私の名前は越前マミ、前世では巴マミって名前で魔法少女をやったわ。

まあ今ではそんなこともなく平和に過ごしているのだけれど。

さて、今日は入学式。

父親に言われて男装しているから、私は越前リョーマとして入学する……勿論学園には許可とってあるわよ？

だから今着ているのは学ランで、黒のヴィッグを被り、黒のカラーコンタクトをして、胸にはサラシ（正直に言うとうるさく苦しい）。

知らない人が見たら、完全に男と見間違えるであろう格好してる。だから、バレル心配はない……答よ。

あの俺様幼馴染のインサイトなら別でしょうけれど。

あいつは異常の域に達しているからね。

同類さえいなければ、私にとって平和な暮らしが出来る世界になる……答！

というよりは、そうであって欲しいわ。

話が逸れたわね。

とにかく、この恥ずかしい名前の中学。

男子テニス部で有名ならしいの。

別にテニス協会からも許可を貰っているんだし、男装しなくても良いとは思わなくて。

どうやら男女差別が嫌いな私の為でもあるらしい。
何だ、あの父親、親らしいところもちゃんとあるじゃないの。
少し見直したわ。

そんな訳で、テニス部に入る為に入学する私。
でもね。

やっぱり人間、やりたくない事はあるでしょう？
私だってさ、男装することなんてそれに比べればお安い御用よ。

……私が新入生代表の挨拶をするよりわね！！
誰よ私に任命したの。

え、成績が一番だったから？
だったら先に許可とりなさいよっ！！

……何て思ったのも数時間前。

今はもう放課後になってるの。

ちなみに、何で今更、っていうのはスルーでお願い。

教師によると、今日からもう仮入部期間らしいの。

だからテニスコートに来たんだけけど……。

テニス部はレギュラーが今いないから、仮入部は明日かららしいの。
それだけならまだしも……。

「なあ、お前らテニス部入んのか？」

先程遭遇した堀尾君、カツオ君、カチロー君。

この三人と話していると、二人の先輩に話しかけられた。

二年の林先輩と池田先輩というらしいこの二人。

異様にニヤニヤとした笑いを浮かべながら一つの提案をしてきた。

「良いゲームがあるんだけどやってみねえか？」

魔法少女の頃からある直感が、嫌な予感を感じさせる。
怪しい笑い方からして、どうやら気のせいではなさそう。
前世と今のお父さん、お母さん。
どうやら私は、入学早々上級生に絡まれたみたいですわ。

「至ってルールは簡単。向こうからサービスを打って10球以内に
缶を倒せたら賞金1万円!」

正直に言うわ。

…何この悪徳商売のような売り文句。
これ絶対に裏あるわよ。

というか、そもそも1万なんて大金はどこから出てくるの？
あなた達は氷帝学園の金持ちな訳？
中学生の払える料金じゃないわよ、それ。

そんな私の思考とは裏腹に、やる気満々な三人組。
…いつか詐欺に引っかからないことを祈るわ。
普通誰でも気付くわよ、これぐらい。

どれだけ純粹なのかしら、あなた達は。
…まあ、そう思って止めない私も私で酷いとは思うけれど。
そう思いながら、私は木陰に入って休憩し始めた。

トボトボと戻ってきた三人。

見ていたけれど、やっぱり裏があったわね。

まず、缶の動き方が変なもの。

普通かすりさえすれば若干は揺れる筈。

でもビクともしなかったってことは、中に石か何か、重いものが入っている可能性が高い。

「やっぱり難しいっすね…」

そういつて挑戦料の200円を払おうとする三人に、先輩達が笑いながら止めに入った。

「はぁ？何勘違いしてんの…お前」

そういつて缶を裏返す片方の先輩。

そしてそこには、さっきまではなかった条件、1球ごとに500円、ということが書かれていた。

…まるでキュウベえのやり口ね。

思い出したら吐き気がしてきたわ。

「おい、そのチビ。おめーもやれよ」

…どうしてこうも厄介事が転がりこんでくるのかしら？

まあ良いわ、身の程知らずには丁度良い機会でしょうし。

私はそう思つて不敵に笑うと、自分のラケットを手取る。

そして、その笑みを浮かべたまま、指定場所に立ち————高くトスを上げた。

平和な暮らしが出来る世界（後書き）

シャ「ママさんがママさんらしくない。

どんどん黒く………！」

マ「あなたのせいでしょう!?!」

桃城先輩との対面（前書き）

前回の続きです。

やっとレギュラーの一人と対面します。

桃城先輩との対面

「別に良いけど……普通に当てるだけじゃ倒れないよ、あの缶」
だって。

「石、入ってるんでしょ？」

そういつて、缶に向かってボールを打つ。
狙いは勿論、缶の蓋。

「すげー！ピンポイントで缶の上蓋をって……え？」

堀尾君が驚いたような声を出す。

まあそりゃそうよね、缶の中からゴロゴロ石が出てきたんだもの。

「クソガキがあ、余計なことしやがって！」

…はい？

いや、悪いのは悪徳商売もどきをしたあなた方だと思っただけ…。
悪いのは私じゃないでしょう？

でもまあ、ガキと言われたのには流石に腹が立つというか。
そう思いながら、腹いせにもう三発サーブを打つ。

「で、何。100発当てたら100万円くれるの？」

どうしよう、何買おうかなー？

そういつて向こうのリアクションを待つ。
焦ってる焦ってる、いい気味だわ。

そんなことを思っていると、突然別方向からサーブが飛んできた。
そのボールは缶に当たり、缶が衝撃で吹っ飛ぶ。

その方向に目を向けると、そこにいたのは先輩らしき人。

「おー、当たっちゃったよラッキー！」

…御免なさい。

あなた、誰かしら？

「か弱い新入生をカモっちゃいけねーな、いけねーよ！」

いやだからあなた誰。

そんな心中のツツコミに気付かず、その人は勝手に話を進めてゆく。
そして堀尾君、いい加減トリップしてないで戻ってきなさい。

「リョ、リョーマ君!？」

突然名前を呼ばれる。

振り向くと、この間知り合った桜乃さん。
友達をつれてフェンス側にいた。

そして、その声に反応する先輩さん。

…だからあなた誰なの？

「…成る程、お前が例の“越前リョーマ”か。出る杭は早めに打つ
とかねえとな」

そういった先輩さん。

先輩さんはラケットを担ぐと、私に向かって堂々と名乗った。

「桃城武、2年だ！」

……何やら厄介な相手に捕まったみたいね。
勝負を申し込まれるだなんて。

ウェアに着替え、ラケットを持つ。

一応誰にも見られてないから、多分大丈夫な筈。
そして帽子を被り、コートに入る。

「バーサンに聞いたんだけど、ツイストサーブ打てるんだって？」

バーサン？

ああ、竜崎さんのことね。

というか、仮にも教師に向かってバーサン呼ばわりは失礼だと…。

まあ、打てるけれど。

それがどうかしたのかしら。

「ツイストサーブ？」

林先輩と池田先輩が不思議そうにその名前を口にする。

どうやら知らないみたいね、ツイストサーブ。

そんな先輩方には堀尾君が説明してくれた。

…分からなかったみたいだけれど。

「まあ、要するに顔面目掛けて球が跳ね上がってくるわけよ」

桃城先輩が簡潔に説明する。

先輩方はやっとな理解したらしい。
というよりは。

私を危険人物みたいに言わないでくれるかしら。

「じゃ、始めるか！」

そういつてラケットをコートに立てた先輩。
コート決めに入るらしかった。

「フィッチ？」

「ラフ」

「残念、スムーズだ。サービスはやるよ、こっちのコート貰うぜ」

成る程、ツイストサーブを見ようって魂胆ね。

でもまあ、そんなに簡単には出さないけれど。

そう思いながら、定位置につく。

さあ、初めての先輩との試合。

精々私を楽しませてね、桃城先輩？

桃城先輩との対面（後書き）

マミさんの性格が違っ…！

また足の怪我が治ったら

「はっ！」

トスを高く上げ、サーブを打つ。

ボールは桃城先輩の横をすり抜け、コートラインギリギリに転がった。

「はええ、いきなりエース取りやがった！」

林先輩達が驚嘆の声をあげる。

そんな先輩達を横目に、私は次のサーブの為にボールを手を持った。桃城先輩は、少しも動じていない。

…中々やるみたいね、彼。

それでも挑発的な視線を向けてくるだなんて。

「いいよ、スライスサーブは。出し惜しみするなよ」

「…………へえ」

ここまで来たら、使うべきなんだろうね。

別にツイストサーブが一番って訳でもないけれど、私的には気に入ってる技。

返せるかどうか、鑑定しがいがありそうね。

「よつと」

今度は本当にツイストサーブを打つ。

相手側コートで跳ねたボールが、桃城先輩の顔面に向かう。

先輩がそれを打ち返そうとすると、ラケットが弾き飛ばされた。

「30-0!」

審判の声が響く。

それでも先輩は、慌てずに何かを考えこんでいた。

成る程、もう見極めてきたってことかしら。

次は返すかもしれないわね、彼。

「はあっ!」

もう一度ツイストサーブを打つ。

桃城先輩は、今までとは違った行動に出た。

「よし、ドンピシャだ!!」

跳ね際を叩き、ボールを打ち返す。

並の判断力じゃないわね、あの先輩。

でも、タイミングが分かっただけではあのサーブは返せない。

ボールは相手のネット際に転がり、私のコートには入らなかった。

「タイミングだけじゃ返せないって訳か……おもしれー!」

ますます好戦的になっていく先輩。

その向こうでは、林先輩と池田先輩が私を見て驚いていた。

多分、こんなに細い体のどこにこんなパワーが、とかそこの疑問でしょうね。

伊達に魔法少女やっちゃあいないってことよ……あんまり関係ないけれど。

何発もツイストサーブを入れ、点を取っていく。

気がつけば、サービスゲームを取っていた。

でも、流石というべきか。

どんどんこちら側にボールが返ってくるようになった。

さらには点数まで。

やっぱり只者じゃないわね、桃城武。

いいわ、面白いじゃない。

倒し甲斐があるわ。

遂にツイストサーブを攻略した桃城先輩。

でもツイストサーブだけが取り柄な訳じゃない。

ドロップボレーなどの技も駆使して、私は次第に点数を稼いでいく。

そして、違和感。

彼の動きに、不自然な所が多すぎる。

私は魔法少女としても特に回復に特化していたから、怪我とかには鋭い方だけけど。

だからこそ、気付いた。

彼は……足に怪我をしている。

それも、かなり影響のある怪我。

どうりで動きが不自然な訳ね。

こんな怪我をした状態で試合なんかしても、怪我が悪化するだけなのに。

それだけテニスが好きなのは良いことでしょうけど、やりすぎは身体に毒。

もうそろそろ切り上げる必要がありそうね。

「それじゃ、もうそろそろ終わらせましょうか」

もうこれ以上、試合を続行させる訳にはいかない。

本気の私には遠く及ばないにしろ、只の人間としての能力のみで見れ私と同等かそれ以上の人材だもの。

また万全の時に試合すればいい。

だからこそ、この事実。

今までプレーをしていたのは右手。

私の利き腕は本来右腕だけれど、テニスの時だけは別。

テニスの時は、左腕の方が圧倒的に強い。

それが分かれば、きつと…。

「はっ、ちよつとタンマ！」

そう大声が上がる。

大声をあげた本人である桃城先輩は——もう試合する気はないようね。

「今回は引いといてやるよ！」

そう言った桃城先輩に、内心で安堵する。

もしこのまま試合を続行していたら、きつと彼は足が使い物にならなくなっていた。

折角強そうなライバルが出来たし、何より私は人を守りたい一心で魔法少女として戦ってきたんだもの。

その私の所為で人が怪我したなんていったら、洒落にならないわ。

去り際、後ろを振り向く。

そこには、林先輩達に心配されている桃城先輩の姿。

そして、ふと桃城先輩と目が合う。

私は少しだけ笑みを浮かべると、唇だけで言葉を伝えた。

『また足の怪我が治ったら』

今度は、お互い本気で。

「はは…。おもしろーじゃねえか」

「何か言ったか、桃？」

「嫌、何でもねえ」

気付いてたのかよ、あいつ。

そう呟くと、桃城もまた笑みを浮かべる。

「今度は絶対、負かしてやるぜ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0787v/>

生意気ルーキーは魔法少女!?

2011年10月9日11時52分発行